

### 「自然と共に生きた民の生活史『屋久島 民具もの語り』出版」事業

## 人々の暮らしの歴史でもある民具にスポットを当て 自然と共に生きた民の息遣いが聞こえる本にまとめる

世界自然遺産の屋久島で環境学習、啓発交流、環境文化イベント、環境調査、情報発信などに携わる「NPO法人屋久島エコ・フェスタ」。次世代に残すべき島の財産は何かという問題意識のもと、島の人々の暮らしを支えてきた民具にスポットを当て、1冊の本を刊行した。イラストで描かれた数々の民具には、ゆるやかな島の時間が流れていた。

### 屋久島に残された貴重な生活史ともいえる 民具の数々が廃校の中学校に保管されていた

その土地の暮らしの記録を伝えるものはさまざまあるが、生活の多様な局面で使われてきた道具＝民具も、そうしたもののひとつだろう。その土地の環境、生活の程度、目的などに合わせ、人々はいろいろな道具を作り、修理し、親から子へと伝えながら使い続けてきた。それは紛れもな

く人々の知恵の結晶であり、暮らしを物語る証人である。

「かなり以前、民俗学の先生が屋久島に調査に見えられて、民具の保存をすすめたそうです。そのときに集められた民具が、南部の平内地区にある廃校になった中学校に大量に保管されているというか、打ち捨てられているような状況でした。島の貴重な生活史そのものといえる、そうした民具にスポットライトを当て、どのように使われてきたかを取材・調査し、出版物として記録に残したいと考えていました」と話すのは、屋久島の自然や生活環境についての意識啓発と情報発信を目的に活動をしている「NPO法人屋久島エコ・フェスタ」理事長の古居智子さん。

古居さんたちは、2007年に屋久島や種子島在住のお年寄りから聞きとった話をまとめた「屋久島 島 ひと 昔語り」という本を出版している（南日本出版文化賞受



本の打ち合わせ風景

賞)。そのときに民具に強く魅かれ、次は民具から見える島の暮らしを表現した本を出版したいと考えていたという。「前の本でイラストを描いてくれた黒飛淳さんが町からの依頼を受け、数年前から中学校に置かれたままの民具の整理を続け、それをイラストという形で記録していました。そんなこともあり、黒飛さんのイラストをフィーチャーした本にしたかったです」と、古居さん。完成した本では、なんとも味のあるタッチで描かれた屋久島の民具たちが、そのまま島に流れたゆるやかな時間を象徴しているようで、民具が主人公となった現代風の絵巻物という印象を受けた。

### 「山に10日、海に10日、里に10日」を切り口に 屋久島に伝わる民具をまとめた絵巻物のような本

「はじまりのかたち—屋久島民具もの語り—」と題されたB5判の本は、全体で88ページ。約130点ほどの民具が描かれ、巻末には「屋久島民具倉庫」と銘打たれたページがあり、取り上げた民具の用途や使い方、暮らしとの関わりなどについて、簡潔に、わかりやすくまとめられている。初版500部が印刷された。古居さんによれば、「本にまとめようという構想は以前からあったのですが、いざ制作すると、どんな切り口にしたらいいのかということ

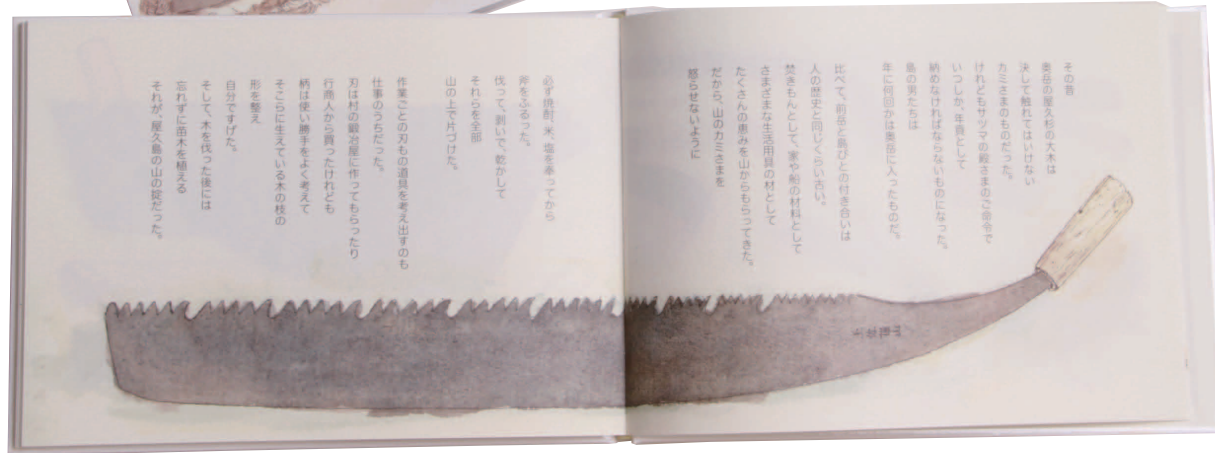
随分、試行錯誤を重ねました。屋久島では1人の人間が山でも、海でも、里でも働いてきた。いわば、万能型。そうした労働の形態を表すものとして、『山に10日、海に10日、里に10日』という言葉があります。これを切り口に本をまとめようということ

を思いつき、そこから一気に書き上げました」とのこと。

保管されている民具は、どれも貴重な歴史資料である



現在は平内地区の倉庫で整理し保管している民具



制作・出版した「はじまりのかたち—屋久島民具もの語り—」

#### 担当者より



文化方面への助成にさらなる充実を。

NPO法人屋久島エコ・フェスタ  
理事長  
古居智子さん

助成がなければ、これだけの本を制作・出版できませんでした。申請書や報告書にしてもAJOSCは助成を受ける側の負担を考慮してくださっているので助かります。文化分野での助成をしているところは少ないので、今後も継続していただきたいと思います。また、複数年にわたる事業への助成もご一考いただければ幸いです。

た黒飛さんは、その苦勞を話す。「今回は、それまで書きためておいたものではなく、この本の体裁に合わせて、ほぼ原寸で新たに描き下ろしました。難しかったのは、ひとつの民具が多用途に用いられているため、どのカテゴリーに入れればいいのか迷ったことと、同じ用途の民具でも微妙に形が異なっているため、どれをもって標準とするのか、その選択に悩みました」。微妙に異なる部分というのは、それを使ってきた人の工夫や愛着がしみ込んでいるわけで、確かに標準化するには難しいものがあるだろう。

この本に込めた思いとして、お二人が異口同音に話すのは、「ものと人が織りなす屋久島の伝統的な暮らしのあり方」であり、それが「現代社会のひずみやゆがみを照らし出す契機になる」ということ。また、世界自然遺産指定後に、浮き足立った感が強くなりつつある島の現状に対する危機感も根底にあるという。「民具はそれが使われていた時代時代の生活史の生き証人。それを使いこなしてきた体験を語るができる人たちの高齢化が進んでいるため、今、何らかの形にしておかないと、その記憶が継承されません。こうしたことが今の屋久島にとって一番大事なことではないかと思っています」と、古居さん。次のステップとして、島に残された歌や芸能を収録することを考えているというが、その実現もまた楽しみである。